

心理学と哲学の岐路：W・ディルタイの心理学を手がかりにした、一九世紀末の心理学と哲学をめぐる状況

ITO, Naoki / 伊藤, 直樹

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(号 / Number)

5

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2009-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007926>

心理学と哲学の岐路

——W・デイルタイの心理学を手がかりにした、

一九世紀末の心理学と哲学をめぐる状況——

伊藤 直樹

はじめに

まず最初に、「心理学と哲学」というテーマに定位した本稿のねらいを述べておきたい。本稿では、「デイルタイ心理学の位置づけ」という作業を鍵にして、一九世紀末の心理学と哲学の状況を明らかにする。このことによつて明らかになるのは、「心理学」と「哲学」とが、この時期には激しく拮抗していたこと、そしてそれが現代でも、両者に対する

る関係に少なからぬ影響を及ぼしているということである。あらかじめ、デイルタイ心理学の位置づけ、ということについては説明が必要であろう。

デイルタイ心理学を位置づける——というならば、それには、internal/external という二つの仕方が可能である。つまり、ひとつには、デイルタイ心理学をデイルタイ自身の思想の全体のなかに位置づけることであり、またもうひとつには、デイルタイ心理学を、その当時の状況、すなわち一九世紀後半の心理学史のなかに位置づけるということである。

ある。本稿での考察は、前者を前提にしながら、後者の視点を前面に押し出すという仕方で行われることになるので、ここではまず、前者の、デイルタイ心理学の internal な位置について瞥見しておきたい。

一般に、デイルタイの思想は「歴史的理性批判」と呼ばれており、その内実をなすのは、精神諸科学の基礎づけという企てである。デイルタイが、このような企てに至った動機の中核は、啓蒙主義以降に生じた、「歴史的成長をあらゆる精神的事実の成立過程と見る」「歴史学派」を認識論的に基礎づけるということにある。デイルタイによれば、この学派は「歴史的過程の特殊性に愛情込めて没頭した」という点で、大いに評価できるものの、しかし、歴史認識の哲学的基礎づけが欠けているという点で問題がある。この欠を補おうというのである。ただしデイルタイは、この基礎づけを、J・S・ミルやコントなどの実証主義的哲学を批判する仕方で行なう。実証主義哲学は、自然科学的方法を精神諸科学の基礎づけの方法へと転用したのであり、それは生を歪めてしまうものであった。もつとも、ここで注意しておきたいのは、J・ミューラーやヘルムホルツからの影響にうかがえるように、デイルタイがここで行なっているのは、実証主義による自然科学的方法の転用への批判であって、けっして自然科学それ自体を批判しているわけ

はない、ということである。

以上のような動機からなされた精神諸科学の基礎づけの特徴は、ひとこと言えば、「生を生それ自身からとらえる」ものだと言え、そしてこれは、「歴史的手続き」と「体系的手続き」という二つの方法によって具体化される (vgl. 1990)。後者の「体系的手続き」とは、精神諸科学の基礎づけに関する理論的考察である。そして前者の「歴史的手続き」とは、その理論の、発生的、すなわち歴史の実証的検証である。デイルタイにおいては、この二つが、いわばセツトになっている。「歴史学派」がそうであったように、「歴史的手続き」のみでは無論不十分であるが、理論的な思弁だけをうずたかく積み上げて、無益である。たとえば、新カント派のリッカートの学問論を想起すればよい。たしかに論理的には精緻に築き上げられているものの、学問従事者の実際からはほど遠いものとなっている (1990)。さらに立ち入れば、このデイルタイの立場は、哲学と経験科学との関わりを規定するものと言ってもよいだろう。ごく初期に、デイルタイはヘーゲル論理学が衰退した理由を、それが経験科学との結びつきを断った点に指摘している (1990)。ヘーゲル論理学の体系は、「ケレス星」の発見などの進展する自然科学の諸発見によって、無効となつてゆく。ここには、ヘーゲル論理学の「傲慢 Eitelkeit」と呼ば

れるものがあつたからである。これは「哲学の傲慢」と呼び代えてもよいだろう。経験科学との結びつきを欠いた哲学は不毛なものとならざるをえない。デイルタイの理論的な「体系的手続き」は、「歴史的手続き」を俟つて、はじめて確かなものとなる。

さて、このような「歴史的手続き」によつて結実したものが、「精神史」あるいは「自伝・伝記」であり、他方、「体系的手続き」の成果が、心理学的基礎づけであり、解釈学的基礎づけである。デイルタイの心理学と呼ばれるものは、このように体系的手続きの一部をなしているのである。ただし、ここでこの心理学的基礎づけについては、やや厄介な、問題を孕んだ点がある。そしてこれが、デイルタイの心理学そのものを分かりづらくさせてもいる。というのも、デイルタイの心理学には二義性が見て取れるからである（²⁰）。ひとつは、上述してきたような、精神諸科学の基礎学の位置を占める心理学である。しかしこれと同時に、デイルタイは心理学を個人の心的生を問題にするものであるとも考えている。この後者の心理学は、これを「個人の意識」を対象とする「個人心理学」だととらえてみれば、たとえばフエヒナーの精神物理学や、W・ヴントの内観心理学、あるいはエビングハウスの記憶研究などの、一九世紀の科学的心理学と重なり合う部分をもつものである。要す

るに、前者を「哲学的心理学」とするならば、後者は経験的心理学だということになる。もつとも、このような、心理学の二義性を指摘しただけでは、問題の解決にはならない。というのも、デイルタイ自身は、全集二一巻、二二巻に収録された草稿が示すように、基礎学としての心理学を、当時の心理学的諸研究の成果を受容しつつ、また批判しつつ構想してきたからである。

しかし、このようなデイルタイ心理学の二義性という特徴は、逆手にとつてみるならば、二つのトピックとして押し上げることができる。ひとつはデイルタイ心理学の発展的研究として internal なテーマをかたちづくる。そしてもうひとつは（こちらが本稿のテーマである）、この二義性が、デイルタイ心理学を一九世紀の心理学史的、哲学史的なコンテクストにおいてとらえるという external なテーマをかたちづくるということである。なぜなら、この時代は、一九世紀という「第二の科学革命」の時代であり、こ

と心理学に関して言えば、科学的な心理学として、しかも制度的にも大きな飛躍を遂げる時期でもあつた。ここからすれば、哲学者デイルタイの心理学は、歴史的なコンテクストのなかで固有の役割を担うことになるからである。すなわち、哲学者デイルタイが、経験的科学的な心理学を問題にするということは、当時の科学的心理学へと、言わば

領域侵犯を行なうことを意味する。これによってデイルタイは、当時の心理学からの批判を誘発することになり、そして実際そのとおりになった。しかし問題はこれにとどまらない。というのも、当時の心理学を批判するという仕方、自らの心理学を主張するデイルタイに対しては、哲学者の側から、その心理（学）主義を批判されることになるからである。新カント派からの批判がこれである。いささかグロテスクな比喻であるが、心理学を語る哲学者デイルタイは、心理学者と哲学者から十字砲火を浴びることになるのである。ここに、一九世紀後半の哲学と心理学との抗争が浮かび上がってくる。デイルタイ心理学の external な位置づけの意義は、ここにある。

以下では、この状況を三つの位相にそって明らかにしてゆく。一つめは、デイルタイに向けられた心理学者からの批判、すなわち H・エビングハウスによるデイルタイ批判である。そして次に、眼差しを心理学内部に転じ、そこでの抗争を見届ける。すなわち古い世代である W・ヴントと若い世代であるキュルペ、エビングハウスとの対立である。そして第三として、哲学の側からの心理学への攻撃を見る。これはヴィンデルバントによるデイルタイ、あるいはヴントへの批判である。これらによって、一九世紀後半における心理学と哲学とのせめぎ合いの状況が明らかになってく

るであろう。

一「学部之争」——エビングハウスの デイルタイ批判

デイルタイは、一八九五年に『記述的分析的心理学のイデー』を発表する。この心理学論文は、それまで著作や論文の随所で折にふれて述べられてきた、精神諸科学の心理学的基礎づけの頂点をなすものだと言ってよい。デイルタイは、この論文のなかで、同時代の心理学の大勢を「説明心理学」あるいは「構成心理学」と呼び、手厳しく批判する。説明心理学とは、「一義的に規定された一定数の要素にもとづいて、心的生のあらゆる現象を構成することができる」(V159)と主張するものである。つまり、この心理学によれば、心なるものは限られたパーツから組み立てることができるといのである。だとすれば、この心理学による主張は、すべてがもっぱら仮説的だということになる。もつとも、自然科学においては、仮説は、進歩のための不可欠な契機であり、それが用いられることには何の問題もない。しかし心理学においては、固有の形而上学の問題がある。それは、精神的世界と物質的世界との関係という問題、すなわち、件の心と脳の問題である。しかし、説明心

理学は、この問題を問うことなく置き去りにしたまま、自然科学的方法を精神現象に適用して臆するところがない。結局、説明心理学は仮説の霧のなかを彷徨うことになる。これに対して、デイルタイ自身が積極的に主張するのは、精神現象が根源的に与えられているという性格である。

「精神科学は、何よりも次の点で自然科学から区別される。すなわち、自然科学が対象とする事實は、外から、現象として、しかも個々別々に与えられたものとして意識され、これに対して精神科学が対象とする事實は、内から、実在として、しかも生き生きとした連関として、ありのままの姿で意識されるということである。したがって、自然科学においては、自然の連関は、仮説の結合にもとづいて、また補足的な推論によつてのみ与えられ、これに対して精神科学においては、心的生の連関は、根源的に与えられたものとして、つねにその基礎をなしている。われわれは自然を説明し、心的生を理解する」(143f.)

デイルタイは、ここから心的生を記述する心理学、すなわち「記述的分析的心理学」を打ち立てようとするわけだが、それを明らかにするのは本稿の狙いではない⁽³⁾。む

しろここではこの心理学に対してなされた、心理学者の側からの批判に目を向けたい。それは、ベルリン大学において、デイルタイと時期を同じくして員外教授を務めていた実験心理学者H・エビングハウスによるものである。

デイルタイは、『記述的分析的心理学』を発表した後、この論文についての批判を求める旨の手紙を、多くの人物にしたためた。そして戻ってきた返信には、エビングハウスのものもあり、手紙と『心理学感覚生理学雑誌』九号⁽⁴⁾に掲載される「説明的心理学と記述的心理学について」という論文の抜刷が付されていた。この手紙と論文に記されたデイルタイ心理学批判は、デイルタイの予想以上に、あるいは予想と異なつて厳しいものだった。その論点は、次の四つに集約することができる。

①デイルタイの批判は、ヘルバルトに該当するものであり、時代遅れである。

②デイルタイの記述心理学と現代の心理学にそれほど差異はない。

③現代の心理学が、因果性に依拠しているというデイルタイの考え方は、現在の心理学には当てはまらない。

④構造連関は体験されるというが、それはできない。その点でデイルタイの心理学もまた仮説的である。

デイルタイは、この批判にいたく衝撃を受け、他の書簡からはその憔悴ぶりがうかがえる。その後、C・シュトゥンプやW・ジェイムズからデイルタイの説に好意的な手紙を送られることなどがありはしたが、結局のところ、この論文に正面から批判を返すことはなく、翌九六年に発表された『個別性研究についての論考』の末尾に、エビングハウスの批判は多くが誤解に満ちていると、喘ぐような文書を付したにとどまったのである。ここで注視したいのは、右にあげたエビングハウスによる四つの論点ではない。むしろ、この論文と手紙とに現われている不必要などとも言わべき激しさである。たとえば、同封された手紙には次のようなくだりが見いだせる。

「貴兄は、かつて私に対して、こうおっしゃいました。
「ベルリンの哲学部にシュトゥンプが来て、自分が、心理学の講義から、やつかい払いされたのは幸運だった」と。私が、貴兄の言葉のなかに感じたのは、貴兄が、次のことをしるべきと認めたということです。つまり、この力強く伸びつつある心理学という分野が、あるアメリカ人が言うように、もはや机上の理論だけではおこなえなくなつてから、貴兄自身、居心地悪く感じているのだ、と。だから、私にとっていっそう驚きだったのは、貴兄

が、ご自身がよそ者になっているというのに、はたから手を出さずじつとしていないで、いまだ大がかりに教師ぶっていることなのです」(一八九五年一月二七日、デイルタイ宛)⁽⁵⁾。

ここに読み取れるのは、ざつとくばらんに言うならば、「よそ者の、アームチェア心理学者のくせに口を出すな!」ということになる。エビングハウスが、デイルタイに向けているのは、その学説への批判である以上に、「学部争い」としての批判なのである。心理学史家M・G・アッシュは、このエビングハウスの批判を「心理学が哲学に向けた反批判の第一弾」だと呼んでいる⁽⁶⁾。

そして、この「学部の争い」を裏書きしているのが、この手紙が届く二年前に生じていた、ベルリン大学正教授のポストをめぐる人事問題の経緯である。高齢のため引退するE・ツェラーに代わって、正教授に誰を招聘するかという問題が生じた。ここで、言わば「黒幕」として暗躍したのがデイルタイである。しかしこの暗躍は、デイルタイ自身にとっては「哲学的問題」なのである。彼は、盟友ヨルクに向けてそう書き送っている⁽⁷⁾。事情をかいつまんで言えば次のようになる。このときベルリン大学の心理学は、W・ヴントのいるライプツィヒに対して遅れを取っていた。

ゆえに心理学者を招聘することが急務である。では、それを誰にするか。このときエビングハウスは、ベルリンの員外教授の地位にいる。当然のことながら、エビングハウスもまた候補の一人である。しかしディルタイは、それを言わば間接的に阻止したのである。結果的には、エビングハウスは、いわゆる「玉突き人事」によってプレスラウの正教授となったが、ベルリンのこの地位に就いたのはミュンヘンの正教授にあったC・シュトゥンプであった。では、なぜエビングハウスではなく、シュトゥンプなのか。それは、その心理学の性格による。このときエビングハウスは、ヘルムホルツなどからも高い評価を受ける紛れもない実験心理学者であった。一方で、シュトゥンプも若くして正教授の地位に就いた力のある心理学者であった。ただし、エビングハウスとは異なり、ブレントラーの弟子であるこの人物は、『音響心理学』などの実験心理学の成果をもちつつも、他方で「心理学と認識論」などの論文で知られる哲学的資質を持っていた。つまり、自然科学のみならず、精神科学にも理解を示していたのである。ディルタイがシュトゥンプを推したのは、このあたりに事情があるう。仮説を振り回す説明心理学（＝実験心理学）ではなく、精神科学の健全な発展を支持する心理学者を招聘すること。これはまさに「哲学的問題」にほかならない。ただしこの見方は、

エビングハウスの側からすれば、このような「ディルタイのような人物」、すなわち心理学の発展を阻止する哲学部正教授こそ、許されざる者なのだ。もうひとつ、エビングハウスの別の書簡を引こう。これは、先にあげた、ディルタイを非難する手紙の二週間後、かつて、員外教授の同僚でもあったH・ディールスに宛てられたものである。

「心理学は、現在の活動にあつては、若く、そして承認を求めて闘っているのです。しかし、心理学はその承認をきわめて高い程度で必要としています。というのも、大切なのは古い世代がもっている対立した先入見を取り除くことだけでなく、心理学の活動のために、外的な手段、すなわち資金や場所を作り出すことなのです。したがってそれは、この方向で圧力をかけることのできるある種の世論を獲得することにならなければならないのです。というのも、このことが切実な問題であるすべての人にとっては、ディルタイのような人物が、学問全体を、彼がはじめてそれをしつらえたように、まずもって方法に関わる事柄として明らかにするなら、どうでもよいものではありえないのです。ディルタイは、多くの人びとの関心と意見に注意を払っています。彼らの判断がきわめて重要だからです。ディルタイはけっして誠実な人で

はありません。……彼は、こせこせした手段を弄する人です。こせこせした手段で、学生を教室に無理やり集めるのです。こせこせした手段で、同僚たちに圧力をかけ、彼らが講義するのを邪魔するのです。要するに彼はこせこせした手段で、自分の出版物の評判を気にかけるのです」(80)。

以上のような心理学から哲学への反撃は、すでにふれたように第一弾にすぎなかった。心理学者たちはこの後、たとえば、第4回実験心理学学会(一九一〇年)での出来事や(9)、マールブルク大学での人事問題(一九二二年)のように(10)その制度的独立を求めて哲学への攻撃を深めてゆくのである。しかし、このような「学部争い」は、たんに学問争いだけではなかった。ひとつの学問のあいだでの新旧の争いでもあったのである。それを次に見よう。

二 心理学をめぐる二つの戦線

心理学史上では周知のことに属するが、心理学は、一八七九年に、ヴントによってライプツィヒに研究室が開設されたことを皮切りに、制度化の道をたどってゆく。このようなかで心理学は、しかし、一八九〇年代に入って、新

たな対立を生み出してくる。それが新旧の対立である。一方は、ヴントに代表される、実験心理学と並行して哲学的な論考も公にする一派である。他方は、その後に続く若き世代の心理学者たち、たとえば、すでにあげたエビングハウスや、ヴント自身に薫陶を受けたヴュルツブルク学派を率いるO・キウルペ、そしてゲッツティンゲン学派のG・E・ミュラーといった人物たちである。

心理学内部でのこの新旧対立は、二つの視点から明らかにできる。一つは心理学の位置づけをめぐる問題である。言わば旧派に属するヴントは、心理学を「精神諸科学の基礎学」として位置づける。よく知られているように、ヴントは、諸科学を二つに区分する。一つは、「直接経験の学」と呼ばれるものであり、もう一つは「間接経験の学」と呼ばれるものである。前者の諸学の研究は、経験する主体と経験内容との関係をその対象とする。これに属するのは、心理学であり、また他の精神諸科学である。それに対し、後者の諸学は、経験する主体を捨象する。これに属するのは、生理学をはじめとする自然科学である。そして、前者に属する心理学は、他の精神諸科学に対して基礎学の位置にある。ヴントは、これを次のように述べている。

「直接的な人間の経験の普遍妥当な形式についての、およびその法則的な結合についての学として、心理学は精神

諸科学の基礎である。というのも、精神科学の内容は、あらゆる場合に、直接的な人間的体験から生ずる行為とその結果のうちに存するからである。心理学が、これらの行為の現象形式と法則の探求をその課題とする限り、心理学は、それ自身で最も一般的な精神科学であり、同時に文献学、歴史学、国民経済学、法学などのすべての個別的な学の基礎である」(傍点伊藤)(11)。

一方で、若き世代の心理学者たちにおいては、心理学は、さしあたってヴントの言う「直接経験の学」と似た位置にあり、たとえばキュルペは、心理学が研究対象とするのは、「体験と体験する個人への依存関係」にあると言う。ただし、ここで言われている「体験する個人」とは、別の箇所では「身体的個人」とも言いかえられる。そして、「身体的なプロセスは、体験との直接的な *directen* 関数関係にあり、人間の場合、もっぱら脳において——おそらくは大脳皮質において見いだされる。この依存関係は、たとえ仮説的なものに過ぎないとしても、つねに実際に作用していると考えられる」(12)。ここには、心理学の自然科学化への明確な一歩が見いだされるし、さらにエビングハウスは、この「身体的個人」という言い回しを「有機体」と呼び代える(13)。

そして、このような心理学の自然科学化が端的に現われ

てくるのは、心理学における「実験」のあり方をめぐってである。まず、ヴントについて言えば、ヴントの実験は、あくまで「自己観察(内観法)」に制限されていたという点を指摘する必要がある。直接経験の学としての心理学の対象は、経験主体とその経験内容との関係に向けられていた。しかし、経験主体がその心的内容を問題にするさい、観察しようとする意図は「心的な過程の出現と経過とを本質的に変化させてしまう」。そこでこの欠陥を補うために実験という方法が要請されてくる。ヴントの実験室において行なわれた反応実験において、しばしば用いられた「減算法」はこれを意図にしてデザインされたものである(14)。もっとも、ヴントは、このような実験をもつてのみ、心理学を特徴づけたのではない。先に見たように、心理学とは「直接経験の学」である。したがって、その限りにおいて実験に拠らない「直接経験の学」としての心理学もありうる。ヴントが晩年に展開した「民族心理学」がそれである。

このようなヴントに対して、若き世代の心理学者たちは、実験心理学こそが、心理学だととらえてゆく。たとえばキュルペは、「実験的方法によつて接近し得ない心理学的な探求のトピックはない」(15)と主張する。そして「無意味綴り」の手法でよく知られたエビングハウスの記憶研究は、ヴントが主観的現象を客観化することに腐心していたのに

対し、「主観の外的な活動が、客観的な必要条件と一致すること」⁽¹⁶⁾にそのポイントがあった。自己観察がともなわなくとも、数値化が可能でありさえすれば、実験が可能だと考えるのである。

さて、以上のような心理学内部での新旧対立に、あえてディルタイを参加させるならどのようなになるだろうか。その大筋は明らかであろう。ディルタイもまた、ヴントと同様に、心理学を精神諸科学の基礎学と見なした。したがって、若き世代から攻撃を受けるところの（そして、実際に攻撃された）旧世代に属するのである。ただし無論のこと、ディルタイは実験心理学者ではない。ヴントなどの実験的方法を評価しはするが、一方でその制限についても言及する。詳述する余裕はないが、ディルタイは、ヴントが実験の限界を認めたまさにその地点にこそ、心的現象の固有性を見て取るのである。つまり、経験主体による自己観察は、その対象に影響を及ぼしてしまふ。しかし、むしろ、その観察による観察対象の変容こそ、観察、すなわち「記述」のかねめである。当然ここには、「循環」が生じてくる。が、その「循環」に正しい仕方であり込むことこそディルタイの狙いであった。ディルタイの方法は、観察者の態度そのものを方法のうちに取り入れ、その変容をも記述するという意味で、「参与的」なものであるとも言えよう。

以上のような素描からすれば、ヴント的な自己観察的心理学は一人称的と特徴づけられるだろうし、一方、若き世代の心理学者たちのそれは三人称的だと言えるだろう。そしてさらにこのまともに乗じれば、ディルタイの心理学は、二人称的とも言うべきかもしれない。

三 ディルタイ（あるいはヴント）

「心理学」に対する哲学からの攻撃

さて最後に、心理学と哲学とをめぐる第三の位相として、哲学からなされた心理学への批判を見てみることにしよう。哲学から心理学への攻撃の代表としてあげることができるのは、よく知られたヴィンデルバントによる「歴史と自然科学」（一八九三年）という講演であろう。マイネッケは、この講演を「実証主義に対する宣戦布告」だと呼ぶ。すでに見てきたように一九世紀後半は、自然科学が勢力を増し、哲学を圧迫し、なかでも心理学は、哲学に取って代わろうとする勢いだった。そこでヴィンデルバントは、次のような立場に立とうとするのである。

「哲学は存在しない、ただその歴史があるのみであるという考えにも、またカントがかつて新たに基礎づけた哲学は、カント自身が理論的な部門のなかで最も低く評価した特殊

科学の枠組みのなかに再びしぼんでゆく、という考えにも私は荷担しない」(17)。

ここで言われている「特殊科学」とは、心理学のことを指していると言つてよいだろう。そしてこのような状況のなかで、哲学を論理主義的立場から擁護しようとするのがヴィンデルバントであり、その結果が、よく知られた、学問の「法則定立的な学」と「個性記述的な学」という区分である。ここでは、この学問区分の意義についてのみふれておきたい。まず第一に、この区分が意味しているのは、これによつて、デイルタイが掲げている自然科学と精神科学という区分が斥けられるということである。先に引いた箇所にあつたように、デイルタイは自然科学と精神科学とを、その対象の与えられ方によつて区分した。したがつて、精神科学においても、一般的な法則を扱う場合もあれば、個別的なものを記述する場合もある。それに対し、ヴィンデルバントは、学を論理的に区分する。法則定立的な学は論理学的に言えば全称必然判断であり、個性記述的な学は単称断言的判断となる。そして第二に、このように区分されることによつて、心理学は、基礎学の地位から失墜することになる。というのも、心理学が対象とする表象、意欲、感情の過程は、化学や力学や生物学と同様に、事柄の生起の法則を問題にするものであり、その意味で心理学は、同

様に一般的法則をとらえようとする。したがつて心理学は、ひとつの経験科学として、法則定立的な学に属することになる。ゆえに、心理学は、基礎学たり得ないのである。このようにヴィンデルバントは、心理学を自然科学へと、言わば困い込み、その基礎学としての威力を削ぐのである。これは、デイルタイへと、そしてまた同様の立場に立つヴントに向けられた批判にほかならない。

とはいえ、このヴィンデルバントによる批判には問題もある。それは、彼の問題設定を引き継いだリッカートによつて顕著になる。ヴィンデルバントが言うところの「個性記述的な学」とは、何をもつてしてその対象を選択するのであるうか。論理主義的立場にとどまる限り、その回答は引き出せない。そこでリッカートは超越論的次元に裏打ちされた「普遍的文化価値」という概念を持ちだしてくる。たしかにこの解決は、論理的には整合的であろう。しかし、S・ヒューズが鋭く指摘するように、「新カント派は本当に実証主義者とそのグラウンドで戦つたことにはならなかつた」(18)ということにもなるのではないだろうか。

結びにかえて

以上、一八九〇年代の心理学と哲学をめぐる状況を素描

してきた。むすびにかえて、いくつかの指摘をして、おわりとしたい。

今までの述べてきたように、一九世紀末は、現在私たちが自明視している、哲学・心理学という学問区分とは異なる、しかも両者が拮抗する状況にあった。しかしその後、両者は別れてゆく。哲学者カッシーラーなどによって「哲学と心理学の再婚」などが囁かれはしたが、結局、心理学は、一九三〇年代に入り、その中心をドイツからアメリカに移してゆく、行動主義心理学、認知心理学などへと展開してゆく。その意味で、大まかに言えば、「若き世代の心理学者たち」の路線をたどったと言えるだろう。無論そこでは、心理学を、精神諸科学の基礎学とするディルタイやヴントの立場などは、もはや過去のものとして葬り去られていると言えるかもしれない。ただしここで、あえて言葉を挟むなら、そのように言えるのは、心理学を自然科学とみなしているからである。心理学は、精神分析も含めて、自然科学なのか精神科学なのか。これは心理学内部での問題である。たとえば、解釈学や構成主義が問題とされるなかで提唱されている「質的心理学」の試みがある。これは、従来の量的研究に対し、意味やナラティブを重視するものである。この方向性は、紛れもなくディルタイ心理学と類縁的なものであると言えるだろう¹⁹⁾。

次に、心理学と哲学との関係をあらためて考えてみるに、心理学が哲学から独立したのか、それとも哲学が心理学から独立したのか、という問題がある。いままで述べてきたように、制度的に見るならば、心理学が哲学部から独立したとするのが妥当であろう。しかし、E・リードなどは、哲学が心理学から独立したと述べてもいる²⁰⁾。ただし、このときリードが考えている「哲学」、すなわち「現代哲学」とは、数学と論理学とをルーツにもつ哲学のことが主に考えられており、その限りでは公平とは言えないだろう。とはいえ、これを「挑発」だとみなせば、わたしたちは、現在、哲学とはどのようなものであるのか、という問いへとうながされることになるだろう。無論、これは困難な問いである。たしかに、現在、有力なものとして「心の哲学」がある。しかしこれは認知科学の一種の「補助学」だと言ったら言い過ぎだろうか。またもう一つ、現在の多くの哲学研究者がたずさわっている講壇哲学がある。しかしこれはもっぱら哲学史研究と呼べるのかもしれない。だとすれば、哲学はいつたどこにあるのか？改めてディルタイを召還してみよう。ディルタイの心理学は、それが精神諸科学の基礎学の位置を占める限りにおいて、哲学の役割を担うものである。ただし、その場合の「哲学」とは、現在のような専門化された一分野としての哲学のことではない。

むしろ「哲学部」としての哲学、あるいはリベラル・アーツにおける哲学であるだろう。デイルタイの思想を「人間認識論」とする特徴づけが有効かもしれない。ただし、この道を、今どう進むのか。それが問題である。

注

デイルタイ全集(Wilhelm Dilthey, *Gesammelte Schriften* 26 Bände, Göttingen 1914-2007)からの引用は、文中に巻数と頁数のみを示した。

- (1) これについては以下を参照。M. Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 20, Frankfurt a. M. 1979, S. 20.
- (2) M・ユングは、デイルタイの心理学の二義性を、「精神的現象の所与一般の形式を認識人間学的に分析する」という意味での心理学と、個人的意識の内容についての学問という意味での心理学」(Matthias Jung, *Dilthey zur Einführung*, Hamburg, 1996, S. 89)との二つに区分している。精神諸科学を基礎づけようとする者、後者の個人心理学なしにもそれは可能であろう。しかし、「デイルタイはそうしない。ここにデイルタイの「心理学」の固有性が現われていると言える。結論のみ言え

ば、デイルタイの心理学は、人間学的な特徴をもつということである。この論点については、次の文献を参照。Die Verwurzelung der Geisteswissenschaften im Leben. Zum Verhältnis von "Psychologie" und "Hermeneutik" im Spätwerk Dilthey's, in: *Kultur verstehen*, hg. von Gudrun Kühne-Berram, Hans-Ulrich Lessing und Vilker Steenblock, Würzburg 2003.

- (3) デイルタイ心理学の全体像については、伊藤直樹「問題としての精神科学の基礎づけ」「精神科学の基礎づけの学としての心理学」(西村皓、牧野英二、舟山俊明編『デイルタイと現代』法政大学出版局、二〇〇一年、所収)を参照のこと。

- (4) *Zeitschrift für Psychologie und Physiologie der Sinneorgane* 9, Leipzig 1896, S. 161-205.
- (5) Hermann Ebbinghaus an Wilhelm Dilthey, in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Band 3, Göttingen 1985, S. 228.
- (6) Mitchell G. Ash, Academic Politics in the History of science: Experimental Psychology in Germany, 1879-1941, in: *Central European History*, Volume XIII Number 3, 1980, pp. 276.
- (7) *Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und dem Grafen*

Paul York von Wartenburg 1877-1897, Halle 1923, S. 165.

- (8) Lothar Sprung und Helga Sprung, Ebbinghaus an der Berliner Universität - ein akademisches Schicksal eines zu früh Geborenen?, in: *Ebbinghaus-Studien* Band 2, Hrsg. von Werner Traxel und Horst Guldach, Passau 1987, S. 100.

- (9) 「*エビングハウスの心理学*」以下を参照。Edmund Husserl, *Philosophie als strenge Wissenschaft*, in: *Gesammelte Werke* Band XXV, Dordrecht 1987, S. 40 (邦訳「厳密な学としての哲学」(世界の名著『フッサール』中央公論社、所収) 一四七頁)。

- (10) 「これについては」以下を参照。U. Sieg, *Die Geschichte der Philosophie an der Universität Marburg von 1527 bis 1970*, Marburg 1988 (邦訳「U・ジーク『大学と哲学——マールブルク大学における哲学史——』理想社、七〇頁以下)。

- (11) W. Wundt, *Grundriss der Psychologie*, Leipzig 1901, S. 19f.

- (12) O. Külpe, *Grundriss der Psychologie*, Leipzig 1893, S. 4.

- (13) H. Ebbinghaus, *Grundzüge der Psychologie*, Leipzig 1897, S. 5.

- (14) 反応実験および減算法については、以下の文献を参照。David K. Robinson, reaction-time experiments in

Wundt's institute and beyond, in: *Wilhelm Wundt in History: The Making of a Scientific Psychology*, ed. by Robert W. Rieber and David Keith Robinson, New York 2001, pp. 161-204.

- (15) Külpe, *Grundriss*, S. 13.

- (16) Kurt Danziger, Hermann Ebbinghaus and the psychological experiment, in: *Ebbinghaus-Studien* Band 2, Hrsg. von Werner Traxel und Horst Guldach, Passau, 1987, S. 220f.

- (17) Windelband, *Präludien Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen 1921, S. 137.

- (18) S・ヒューズ『意識と社会』(生松敬三、荒川幾男訳、一九七八年、みすず書房) 一一一頁。

- (19) この問題については、以下の論文で考察したことがある。「心の学と人称性の問題——デイルタイの人間科学の現代的意義——」『理想』No. 672、二〇〇四年二月、理想社。

- (20) 「したがって、十九世紀末の哲学というものは、心理学と哲学という二十世紀における二つの独立した学問分野が流れ出るようになった一つの源流として見なければならぬ。現代の科学的心理学のルーツが、それ以前の伝統的哲学のみならず生理学と医学にあったように、現代哲学のルーツは、それまでの伝統的哲学

だけではなく数学と論理学にあるのだ。繰り返して言う
と、科学としての心理学が哲学から分離したという
見解は誤っている。こうした見方そのものは、実証主
義者が作り上げた神話以外のなものでもない」。

Edward S. Reed, *From Soul to Mind: The Emergence of
Psychology: Erasmus Darwin to William James*, Yale
University Press 1977. (邦訳『魂から心へ 心理学の誕
生』村田純一他訳、青土社、二〇〇〇年、二五八頁)